

令和元年度病害虫発生予察特殊報第2号

令和元年9月12日

千葉県農林総合研究センター長

ネギハモグリバエの別系統の発生について

1 害虫名：ネギハモグリバエ別系統

2 学名：*Liriomyza chinensis* Kato

3 作物名：ネギ

4 発生確認の経緯及び県外での発生状況

- (1) 令和元年8月末、千葉県農林総合研究センター職員が現地ほ場定期巡回中に、印旛地域の秋冬ネギほ場において葉が白くなる被害を認めた。この被害状況は既に他県で発生が認められているネギハモグリバエ別系統によるものと類似していたため、このほ場の被害株周辺から成虫個体群を採集した。
- (2) 千葉県農林総合研究センター生物学研究室において、採集した成虫の塩基配列を調査し、東北農業研究センターで解析した塩基配列データ（上杉・徳丸，2019 応動昆大会）と比較した結果、9月11日に従来の遺伝子型（以下、「A系統」と略記）とは異なる遺伝子型である別系統（京都府、茨城県及び富山県で確認された系統と同じ系統）と同定された（以下、「B系統」と略記）。
- (3) B系統の発生に関する病害虫発生予察特殊報は、平成31年3月に京都府から、令和元年5月には茨城県及び富山県から、それぞれ発表されている。

5 特徴

(1) 形態

ネギハモグリバエA系統及びB系統の形態による識別は困難である。

両系統とも成虫の体長は約2mmで、胸部と腹部が黒く、その他の部分は淡黄色である（写真1）。幼虫は、うじ虫状で、成長すると体長約4mmに達する（写真2）。蛹は体長約3mmの褐色で俵状である。

(2) 生態

両系統とも成虫は葉の組織内に産卵し、孵化した幼虫は葉の内部に潜り込んで葉肉を食害する。幼虫は成長すると葉から脱出し、地表又は土中で蛹となる。

(3) 被害

一葉に複数頭の幼虫が、葉の内部に潜り込んで集中的に葉肉を食害する。

B系統は、A系統と比較して、一葉あたりの幼虫数が多い傾向にある。B系統の初期の食害痕は、従来のA系統と同様で、不規則な白線状だが、進展すると近接した食害痕同士が癒合し、葉全体に及び、葉が白化したようになる（写真3）。葉肉が食い尽くされて、表皮が浮いた状態になり、表皮を剥離すると、多数の幼虫が確認される。

6 防除対策

- (1) 両系統を形態で識別することは困難で、塩基配列データをその都度調べるのも現実的ではない。したがって、同虫の発生を認めたら、系統に関わらず、下表を参考にネギハモグリバエに

適用のある薬剤により、発生初期の防除を徹底する（現時点では、系統間の薬剤感受性の違いは明確でない）。

(2) 被害葉及び収穫残さは本虫の発生源となるので、残さは、ほ場内に放置せず、一カ所にまとめて積み上げ、ビニール等で覆い、裾部分を土で埋める等適切に処分する。



写真1 別系統の成虫



写真2 別系統の幼虫



写真3 別系統（B系統）による被害



写真4 従来系統（A系統）による被害

※写真は千葉県農林総合研究センター原図

表 ネギのネギハモグリバエ防除に使用できる主な農薬（令和元年9月1日現在）

薬剤名	希釈倍数・使用量	使用方法	使用時期	有効成分	IRACコード※
ベストガード粒剤	5g/培土ℓ	育苗培土混和	は種時	ニテンピラム	4A
	6kg/10a	植溝処理土壌混和	定植時		
	6kg/10a	株元処理	収穫前日まで		
ベリマークSC	400倍	灌注	育苗期後半～定植当日	シアントラニリプロール	28
	2000倍	株元灌注	収穫7日前まで		
アルバリン顆粒水溶剤/ スタークル顆粒水溶剤	50倍	灌注	定植前日～定植時	ジノテフラン	4A
カスケード乳剤	4000倍	散布	収穫14日前まで	フルフェノクスロン	15
アフーム乳剤	1000倍	散布	収穫7日前まで	エマメクチン安息香酸塩	6
リーフガード顆粒水和剤	1500倍	散布	収穫7日前まで	チオシクラム	14
アクタラ顆粒水溶剤	1000～2000倍	散布	収穫3日前まで	チアメトキサム	4A
アグリメック	500～1000倍	散布	収穫3日前まで	アバメクチン	6
ディアナSC	2500～5000倍	散布	収穫前日まで	スピネトラム	5

※IRACコード：殺虫剤の作用の仕組みの分類を表すもので、害虫の薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一コード内の薬剤を重ねて使わないことが望ましい。

問い合わせ先

千葉県農林総合研究センター病害虫防除課

〒266-0006 千葉市緑区大膳野町 804

TEL 043(291)6077

FAX 043(226)9107

E-mail cafrc-bojo@mz.pref.chiba.lg.jp